ぴっぴだより

No12. 2024. 2. 28

太陽が山の向こう側に沈み、山の端が薄ピンクに染まる中に浮かび上がる木立のシルエットや落ち葉が雨に濡れて解き放つ匂い。移住して 10 年、私にもこの場所で新しく堆積していつか「懐かしい記憶」として呼び覚まされるであろうものができてきました。

小さい頃の思い出を振り返ると、記憶を呼び覚ますものは色々挙げられます。瓦屋根にあたる雨粒の音。土手いっぱいのつくしんぼう。祖父と飲むコンデンスミルクたっぷりの紅茶の味。でも、聴覚や視覚など思い出を蘇らせる感覚は数多あれど、私の場合(もしかしたら一般的に？)、匂いによって呼び覚まされる感覚はどれにも増して強いんじゃないか…。昨年、そんなことを考えさせられた出来事がありました。

叔父の葬儀のために生まれ育った街を訪れた夕暮れ時。都内の住宅街を通った私はふっと小さい頃に戻ったような気分になりました。それは大人になった自分から見た「懐かしいなぁ」とふわっとよぎる感覚ではなく、子どもの自分に「連れ戻される」というような強いもので、母や祖母に手を引かれた幼い私に戻った気がして一瞬道の真ん中に佇んでしまいました。

小学生まで暮らしたその街を離れた後も、時折訪れては何度となく通った道ではありましたが、そんな錯覚に陥ったのはその時かいだ「におい」から記憶が蘇ったからなのだと気付きました。それは決して良い香りとかいうものではなく、夕暮れ時の台所から流れてくる食べ物と近くの銭湯脇のコインランドリーと、もしかしたら側溝から漂う決していいとは言えないにおいも混じった独特のものだったと思います。

この「連れ戻される」強い感覚が忘れられず調べていくと、“プルースト効果”と呼ばれる嗅覚のメカニズムがあることが分かりました。それによると、「におい」と記憶の繋がりはとても密接なようです。人間の五感のうち、視覚・聴覚・触覚・味覚は脳の視床を通って理性や知性を司る大脳新皮質へ送られます。しかし、嗅覚による刺激は、感情や本能を司る大脳辺縁系に直接送られるそうです。しかも、嗅覚野は海馬と呼ばれる記憶と司る部分と近い部分にあるため、においの刺激が嗅覚野に入った瞬間に情緒を伴った記憶が無意識に呼び覚まされるのです。楽しかったり幸せだったりした時に嗅いだにおいは、後に同じ匂いを嗅いだ時にその感情と共に思い出されるのです。

あの強い感覚の原因はこれだったのか！と思いました。

子ども達のちょっと汗ばんだ髪のにおいが好きで、誰のかわからない分からない衣類もついにおいをクンクン嗅いで持ち主を確認するにおいフェチ(？)の私は、未だに母に会うと「ちょっといい？」と髪のにおいを嗅がせてもらうし、高校生の息子も普段はそっけないですが、時々すれ違いざまに私の服の匂いをクンと犬のように嗅いでいきます（笑)。安心する母のにおいを無意識に求めているのでしょうね。視覚や聴覚と違って、「この景色」「この曲(音)」…と特定できない曖昧で個人的な所も嗅覚の特徴なのかもしれません。

私の体験も、東京都内のごみごみした商店街を抜けた住宅地の昭和初期に建てられた祖父母の家で育ったから持っている「懐かしい気持ち」なのだと思います。記憶はとても個人的なものですからそこに結びついた感覚としてのにおいもひとりひとり違ったものなのでしょう。この時の私と同じにおいを嗅いだら、不快に思う人の方が多いかもしれません。

さて、長野の自然豊かなこの土地で、自然の恵み溢れるぴっぴの森で幼少期を過ごした子ども達は一体どんなにおいに包まれて成長し、自己を形成していっているのでしょうか。「におい」と「記憶」の関係を考えるようになってから、子ども達と過ごす時に考えるようになりました。薪から立ち上る煙のにおい？アブラチャンの実を剥いた時の爽やかないおい？いえ、それは単純に言葉では言い表せないもっと個人的でささやかな「におい」、その子だけが感じて懐かしむことのできる「におい」なのでしょう。

いつか外の世界に羽ばたいていった子ども達がこの場所に戻ってきた時に「おかえりなさい」と迎える心地よい「におい」に出会っていることを願って…。

：　峰岸麻奈(ねぎ)

森と絵本と巡る季節　3月

春の兆し音…♪といったらみなさんはどんな音を想いうかべますか？小鳥のさえずり？やわらかな風の音、それとも春の嵐!?　私はぽっとん、ぽっとん　ととととん…♪という屋根から雪がおちてくる雫の音で春になってきた、あたたかくなってきたなあと感じます。（最近は日中あたたかい日も多くなってきたので春ばかりにその音がきこえるだけでもないのですが…）

まっ青な空をバックに屋根からキラキラと下がるつららを眺める時近づいてくる春を感じます。なぜか、というとこの辺りはつららというのは厳冬期はほとんど雪がとけず、つららもなかなかできないのです。

春が近づいてくると、ぽとん…ぽとん…と雪がとけてつららができるのです。

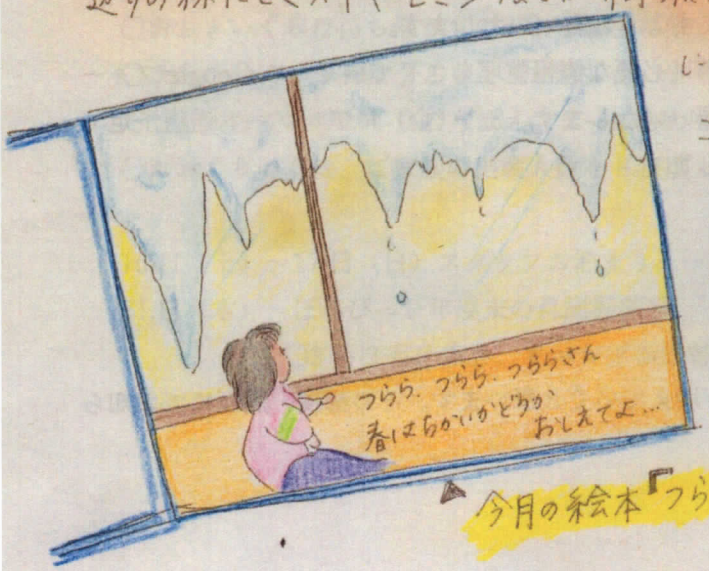
そして「つらら」といえばこどもたちはみつけると目を輝かせ、とって！とって！と大コーラス。そしてペロッとついなめてしまいますよね…。

実は、子どもたちだけでなく、森のいきものにもつららが大好きないきものがいます。それは『エナガ』春先に、木々が地面からすいあげる樹液がぽたん、ぽたん…と枝や幹から滴りおちるのですが、それが3月頃はつららとなって下がっていることがあります。それを飛びながら滑めるのです。樹液はほんのり甘く、様々な栄養成分も含まれています。イタヤカエデの樹液はみなさんもご存知の「メープルシロップ」です。ほかにもこの辺りの森だとミズキやモミジなどが樹液をよくだしています。雨でもないのに木の根元に水がたまっていたら、きっとそれは樹液です。

これからの季節、葉が芽吹くまでぜひ探してみて下さい。

でも、つららや、雪遊びが楽しめる日々がもう少し続きますように…。と銀世界の中笑顔で雪とたわむれている子どもたちを眺めているとおもうのでした…。

（菜々恵）



▲今月の絵本『つららがぽーっとん』福音館
小野寺悦子　ぶん
藤枝　つう　え